



Embassy
of the Republic of Poland
in Tokyo



2020年10月27日

ニュース・リリース

2020年は《ロマン・インガルデンの年》



写真：PAP/Irena Jarosińska

2020年は、ポーランドの最も傑出した哲学者のひとり、ロマン・ヴィトルト・インガルデン（Roman Witold Ingarden、1893-1970）の没後50周年にあたる。

ロマン・W. インガルデンは1893年、クラクフに生まれ、ルヴフ〔Lwów 現在ウクライナのリヴィウ Львів〕、ゲッティンゲン、ウィーン、フライブルク・イム・ブライスガウの各地で、数学と哲学を学んだ。第二次世界大戦後はクラクフのヤギェロン大学で教えた。ロマン・インガルデンはまたポーランド学術アカデミー〔PAU〕、ポーランド科学アカデミー〔PAN〕の会員であった。

著書、論文、翻訳、そして手稿から成る、ロマン・W. インガルデンが遺した業績は圧巻であるとともに、その領域は文学の哲学をはじめとして美学や認識論から存在論におよぶ広範なものである。その仕事の出発点は現象学にあったが、時とともにインガルデンは独自の思考スタイルと用語を確立し、哲学のためのポーランド語を豊かにした。

とりわけ強調に値するのは、妥協をよしとせぬその不屈の知性であった。彼が主著『世界の存在をめぐる論争』を書いたのはドイツによる占領時代のさなかであり、1950年には、マルクス主義に対する批判的な姿勢をとった廉で本務校であるヤギェロン大学において講義をする権利を剥奪され、現象学に関する著作の刊行を禁じられた。その結果生じた自由な時間を、インガルデンは創造的な仕事にあて、インマヌエル・カントの『純粹理性批判』の模範的な翻訳を完成した。1956年、インガルデンは教壇に戻った。生涯の最後まで、精力的に仕事をつづけ、著作を出版し、数多くの国際会議に出席し、ヨーロッパやアメリカ合衆国で講義をした。インガルデンの著作には、イデオロギー的頑迷さや独断的前提、自分だけが正しいとする思いこみといったものが見あたらぬ。そこにあるのは人間に対する思いやりである。

ポーランド共和国下院は、哲学者インガルデンの業績と姿勢のすぐれて高い価値を認め、2020年を《ロマン・インガルデンの年》として制定するものである。

なお、駐日ポーランド共和国大使館の建物の建築を担当したのは、インガルデンの孫にあたる、建築家のクシシュトフ・インガルデン（Jacek & Ewy との協力による）。また、2005年の愛知万博におけるポーランド・パビリオンの設計も彼が行い（アレクサンデル・ヤニツキ、そしてJacek&Ewy との協力）、さらに現在、クシシュトフ氏は在クラクフ日本国名誉領事も務める。

ロマン・インガルデン年を記念して、ポーランド広報文化センターでは同氏を紹介するウェブサイトを作成した：<https://instytutpolski.pl/tokyo/rok-romana-ingardena-jp/>（日本語）と<https://instytutpolski.pl/tokyo/pl/rok-romana-ingardena/>（ポーランド語）。

文責：ポーランド広報文化センター

Ambasada RP w Tokio

<https://www.gov.pl/web/japonia/ambasada>

tokio.amb.sekretariat@msz.gov.pl

Twitter: @PLinTokyo

Facebook:

<https://www.facebook.com/Ambasada-RP-w-Tokio>

Instytut Polski w Tokio

<https://instytutpolski.pl/tokyo/>

tokio@instytutpolski.org

Twitter: @PLInst_Tokyo

Facebook:

<https://www.facebook.com/InstytutPolskiTokio/>